ポスター発表　　【オンデマンド】

ホセ・マルティをめぐる米玖の研究動向について

松枝愛（東京外国語大学大学院）

キューバの第二次独立運動を率いたホセ・フリアン・マルティ（1853-1895）をめぐる研究は、これまで度々政治的に利用されてきた。キューバ独立後の国家形成過程でその存在が神格化され、キューバ革命戦争中からフィデル・カストロはマルティを革命思想の支柱と位置づけた。1959 年の革命政権樹立後、体制派は教育政策の一環としてホセ・マルティの思想を革命思想と結びつけ、国内のみならず世界的にも彼の名前が知れわたった。一方で、国を出ていった亡命キューバ人たちは、体制派とは異なるホセ・マルティ思想の正統性を訴えるようになった。

これらの動きに寄与したのは、政治権力、ジャーナリズムや出版の力も大きかったと言えるが、ホセ・マルティ研究者たちの存在も有力だった。ダルハウジー大学のジョン・M・カーク教授が 1980 年代初頭にまとめたマルティ研究史によると、1920 年代から 30 年代にかけてマルティを「使徒」、「キリストの再来」などと呼んで神格化し、マルティの生誕 100 周年でも同様の見解を続けた「伝統的」研究者たちは、革命以降、米国ほかラテンアメリカ諸国のマルティ研究に引き継がれた。翻って革命政権初期の研究で光が当てられたのが、マルティの反米思想、反帝国主義思想のテキスト解釈だった。「伝統的」研究者たちはこれに反駁し、亡命キューバ人の思想の趨勢に寄り添う形で、自らの主張の正統性をマルティの言論に求めた。

より「中立的」なマルティ研究に舵を最初に切ったのは、体制派キューバの研究者たちだった。マルティの米国観を「最も論理的にバランスよく」まとめているとカークが評価するのは、当時キューバ国立ホセ・マルティ研究所の所長だった知識人フェルナンド・レタマールだ。

このような傾向が米玖の研究者間の意識を変えていったのか、テキストに基づいた中立的な解釈に力点が置かれるようになり、政治的障害を越え 1980 年代からは概ね同じ方向性を歩み始めたといえる。今世紀に入ってからのマルティ研究は、米国でもキューバでもカルチュラル・スタディーの視点に立ったものが目立つ。例えばマルティの先住民や人種についての解釈は、その趨勢にある。ただし、資金的にも潤沢で自由に批判できる米国の研究者と異なり、キューバでは渡航の自由や物資不足が研究の進度や国際的な発表の場への参加の足枷となる懸念が常にあり、研究内容も緻密なテキスト解釈になりがちな傾向がうかがえる。

ポスター発表　　【オンデマンド】

在日非日系イスパノアメリカ人日本映像文化ファン
—居場所と移民者としてのアイデンティティの形成—

Piffaut Galvez Marcelo（京都大学大学院）

本稿では、在日非日系イスパノアメリカ人日本文化ファンがアイデンティティと居場所を構築する過程を説明する。参与観察や質的インタビューを通して彼らの経験を掘り下げて究明した。まず、ラテンアメリカでは、日本の映像作品にアクセスできるようになってから今まで少なくとも 30 年あり、いわゆる異文化への関心の基盤となっている。アジア国々の第一次的な文化的代表は日本だったと言える。これらの代表的な映像作品は、視聴者にとって多様な面白いジャンルとなり、現在まで優位に立っている。だから、在日非日系イスパノアメリカ人の中で、オタクまたはゲーマーとして自分を自己区別し、来日前から日本映像文化に巻き込まれていることが当然である。つづいて、オタクとゲーマーは大衆文化の産物を使用または消費するのが自分を認識し、アイデンティティの因子となる。彼らの消費慣行が独自の象徴的な世界の構成に特定の論理を持ち、大衆文化の作品に基づいて実行する「他者」の文化的、関係的および異なるアイデンティティの構築を有する対象者として理解されている。こうして、オタクとゲーマーはファンコンベンションに参加し、日本からのメディアを賞賛の対象とし、共通のファン文化を共有し、「象徴的な世界」を与える共通の「ファン文化に満ちる居場所」を形成している。ファン文化とその象徴的な世界に対して帰属意識がある。したがって、「我々オタク・ファン」と「他者」との区別に焦点を当てることにより、「外界のファンではない他者」との区別は最重要な要素であり、オタクやゲーマーが社会文化的慣習を共有する同じファンの集団の構成員となる基盤である。ただし、日本の大衆文化と同じオブジェクトを使用しており、その使用により、ファンは同じファン文化と共通の慣行を共有していると同時に、同じ作品に対して異なる意味を付与し、力関係が構築されることにより、区別が生じ、「正当な」—また異質な—「アニメオタク」を「他者」というゲーマーから区別し、異質で断片的なアイデンティティを構成している。つまり、部外者と部内者の差異であるが、同時に部内者の内部的な区別化という意味している。最後に、移民者は—移民の地位だからこそ—直接的かつ時には冷酷に「他者」と自分のイメージに直面している者たちである。このため、アイデンティティに対するニーズが強化され、新しい環境だけではなく、個人的な背景や好みに応じて変化しており、日本人のオタクとは異なるものとして自分を識別するということが明らかである。